

# キッシンジャー訪中と

## 米中関係

中嶋嶺雄  
(東京外国語大学助教授)

井上茂信  
(サンケイ新聞論説委員)

対談

井上 アラブ諸国を訪れて中東停戦の地固めを行なった、アメリカのキッシンジャー國務長官は、十日に北京に到着、同日夜の第一回会談を皮切りに、中国側首脳と三回にわたって公式会談を行ないました。またキッシンジャー長官は、十二日夜、毛沢東主席とも会談しました。キッシンジャー・毛沢東会談は、第一回が、昨年二月のニクソン訪中の際、第二回がことし二月、事実上の米中復交ともいふべき連絡事務所の相互設置が決まったときですが、今度はその三回目です。毛主席が同一の外交政治家と三回も会見したのは珍しいことで、しかも会談は二時間四十五分という異例の長時間だったといえます。これは今度のキッシンジャー訪中に、中国側がいかに期待を込めていたかを示すものだと思います。会談の結果につきましても、共同コミュニケで

は、連絡事務所の機能を拡大する、人事、貿易交流を拡大する、こううたったのが新しい点で、あとはだいたい七二年の上海コミュニケを再確認したものでありました。さて、米中会談で具体的に何が話し合われたかにつきましては、共同コミュニケでは、単に広範な視野の広い問題を話し合ったというだけで、明らかでありませんが、キッシンジャー長官は、共同コミュニケには盛り切れなかったほどの成果をあげたといっていますところから、現在の国際情勢について相当突っ込んだ話し合いが行なわれたと思います。さて、中嶋先生、今度の米中会談について、全般的にどのような印象をお受けになりましたか。

中嶋 ただいま井上さんのお話にもありましたように、中国側が非常に興味で期待していた。夜なかなまで話し合われたというところがいわれておりますね。わたたくしは、そういう状況を見まして、いわばかなり広範な問題が突っ込んで聞かれたらどうというふうな印象を受けているわけです。これはキッシンジャー國務長官の記者会見のブリーフィングにも、共同コミュニケには盛り込まないことがたくさんあるんだということがいわれておりましたし、その意味では、米中双方にとってはかなり重要な会談であった。

ところで問題の焦点である米中関係の問題ですが、わたたくし米中関係について、どうも台湾問題での現状維持ということが、上海コミュニケの線に沿ってさらに確認されたのではないかと印象を受けました。もともと米中コミュニケそのものの受け止め方が、わが国ではいわずに正しい受け止め方がされていませんし、そもそも上海コミュニケ、つまり米中接近そのものが、台湾の現状維持という大きな戦略の上に、それに米中双方とも一致したという線に乗っていったわけでございまして、そのことがますます確認されたのではないかと思えます。

に迫る影としてアジアに存在してきておられますので、こういう問題を含めてかなり全般的な討論がなされたのではないかと、いふように思っています。その点ではかなり重要な会談ではなかったかと思うんです。

井上 そうですね。わたたくしの印象として、第一に指摘したいのは、米中高官による協議が定期化したというのを思いました。七二年二月の米中共同声明のい

らばん終わりのところに、「米高官の代表の北京派遣を含むさまざまな経路を通じて接触を保つ」という項目がございしますが、キッシンジャー訪中は、その項目を具体的にやったということ。

二番目に、さきほど先生がおっしゃいましたように、台湾問題については現状維持ということを確認した上で、しかも積み上げ方式で、通商、文化面で実質的に米中関係を改善していこうと。それはさきほどおっしゃいましたように、対ソ関係が背後にあるわけです。

第三番目に、米中は着実に意思疎通のパイプを太くしようとしていること。このことは今度の共同声明で権威ある水準での頻繁な接触を維持しようという点が、とくにうたわれたところがあると思えます。

しかしながら、その間、ニクソン訪中以来、国際情勢かなり大きくいろいろ変化いたしましたですね。そういう状況の中で、とくにソ連との関係が、中国にと

っては、非常に大きな、じわじわと中国に迫る影としてアジアに存在してきておられますので、こういう問題を含めてかなり全般的な討論がなされたのではないかと、いふように思っています。その点ではかなり重要な会談ではなかったかと思うんです。

井上 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

中嶋 そうですね。

中嶋 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

井上 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

中嶋 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

井上 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

中嶋 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

井上 それから連絡事務所の拡大につきましては、米中間の貿易がことしで三億ドルに迫ろうとしているところから、

領事事務とか、通商代表部といったものまで拡大するんじゃないかというふうに考えてます。

それから問題は、今度の米中会談のタイミングですが、現在の国際平和の大きなわく組みは、要するに米中ソの三極なんです。七〇年二月の米中会談以後の米中ソ関係を見ますと、どうも米ソ関係のほうが進みすぎてるんじゃないか、といますのは、七二年の五月に米ソ首脳会談が行なわれた。ことしの六月にはブレジネフ書記長が訪米して、米ソ会談をやった。で、七〇年の米ソ首脳会談では戦略兵器制限交渉を進めることや、経済交流は合意しました。それから七三年の米ソ首脳会談では、核不戦協定が結ばれたという点で、ワシントンと北京の間に連絡事務所をつくったという米中の関係から見ますと、米ソ関係のほうが進みすぎた。それで今度の米中会談というのはバランスを戻す意味があると思うんですが、先生、この点はいかがでしょう。

中嶋 そうですね。米ソはやはり世界のパワーですから、その場合に、中国はいわばイメージとしての世界のパワーという面がありました。その点で、米ソにはいろいろ調整しなければいけない問題があったという事は、この間のブレジネフとニクソンとの会談でも明らかであったと思うんです。で、これまで米中関係というのは、米ソの、実務性を含む関係に比べて、非常に政治的な関係の

ほうが、より多かつたわけでございます。その点は、いまご指摘のように、いわば世界の現状を反映して、こうならざるをえないんだらうと思いますが、今回の米中会談に現われているように、今後はかなり双方とも実務面でもいろんな問題が出てくるんじゃないかという気がいたします。

それからもう一つ注目されるのは、これはよく今度のコミュニケについていわれることですが、米中双方ともかなり不安定な政権の基盤に、内政的には立ってゐるんじゃないか。それを反映するかのようになり、いわば「いかなる政権が米中双方に出てきても、米中両国の友好は変わらない」というような表現でございます。で、これはどうも新華社のほうには、この「いかなる政権が出てきても」というような表現が抜け落ちて紹介されているらしくて、このへんは、やはり、かなりいろいろ問題が両方にあるんじゃないでしょうか。

井上 なるほどね。それから付け加えますと、やはりわたしは、中国が米ソ関係でいちばん心配したのは、米ソ核不戦体制だと思ふんです。といいますのは、この核不戦協定は、第四条に、いかなるときでも兩國、つまり米ソですね、米ソ関係、あるいは他の国との関係が、核戦争の危険を引き起こすようであれば、兩國、つまり米ソはただちに緊急協議を行なうという項目があるんですが、この項

目を、解釈のしかたによっては、たとえば中ソ間で核戦争の危険があるような場合には米ソが緊急協議するということ方も理解できるわけで、当時のあの中国側の反響を見ますと、これは米ソが核の独占を図るものだ。

それからまた同時に欧州、中国で米ソが相互兵力削減をやる、あるいは全欧安保会議を開く、そうしてソ連はそれによって浮いた兵力を中国に回すんじゃないかというような危惧を、中国側は表明しておりますから、この点につきましてやはり中国側のほうが首を長くしてキッシンジャーの訪中を待っていた。だから毛沢東首席が異例の長時間にわたって彼と会談したというのは、そういうふうな背景があったんじゃないかと思うんです。

中嶋 そうでしょうね。  
井上 それからおもしろいのは、今度の中東戦争で、最初のうち「人民日報」や「新華社」は、米ソ兩國はバレスチナ人民の正義の闘争に妨害を加えているとあって、キッシンジャー氏を呼び捨てにして非難してたわけなんです。でも、どうもわたしは、今度の中東戦争では、アメリカと中国の利害が一致してきたんじゃないかという節がうかがわれるわけです。どうも今度の中東戦争でいちばん得をしたのはソ連じゃないかと。  
といいますのは、ソ連はこの米ソ首脳会談で、中東の政治解決、平和解決を約

束しているながら、現実には、高性能ミサイルをエジプトに与えて、エジプトの戦の勝利を導いた。

その点から、今度の会談では、中東問題を通じて中国側がキッシンジャー氏に、しっかりとやってくれということをお願い。と同時に、アメリカ側としても、ソ連を動かすこととして中国との接近を図る、そういう配慮があるように思うんですが、いかがでしょうか。

中嶋 そうですね。従来の中東戦争の背後にあった中ソという図式は、どうもくずされつつあるような気がわたくしもいたしますね。

井上 それから共同声明で、わたしちょっと注目したんですが、アジア太平洋地域、あるいは、世界のいずれの地域でも覇権を確立しようとする、いかなる国の野心にも反対する。世界のいづれの地域というの、どうも中東と、前はアジア太平洋地域だったんですが、これはやはり中東問題を意識しての共同声明だと思ふんです。それで、いま一つ問題にしなきゃならないのは、米中接近を促しつつある兩國の国内体制ですが、アメリカの場合には、ウォーターゲート事件でニクソン政権はゆさぶられてるが、外交上の特典をやりたいということなんです。その点、アメリカ国内でニクソン弾劾の動きに対して、あの有能なニクソン氏を失うのは惜しいという声、弾劾反対の声として浮かび上がっていくわけなんです



かなりある意味ではそのマナーバーとして流されている面もあるのではないかと  
いう気がします。しかしながら現在の中  
ソ関係を見ますと、相互に大規模な中  
ソ戦争をギリギリに抑止し得る段階がある  
意味でわきまえた上で、その抑止の限界  
において、かなり対立が続くのではない  
か。とくに中国側から見ますと、内政上  
の必要としても、いま必要とするわけ  
ですから、この点で、当面全面戦争にな  
ることはなくとも、かなり恒常的な一つの  
要因として、中ソ対立は当面あるんじや  
ないかという気がします。

単にその国境問題だけで見てはいけな  
いので、今回のコミュニケにもありまし  
たように、全体として中国は、アジア  
が、アメリカが撤退したならば、そこに  
真空地帯ができることを恐れているわけ  
ですから、それをまたソ連は、このとこ  
ろかなり中東でもそうですし、アジアで  
も点数かせいでいる。

井上 なるほどね。  
中嶋 こういう状況から考えますと、  
かなり中ソ関係というのは深刻である。

井上 その点でわたしは、問題としな  
きゃならないのは台湾の意味だと思っ  
てます。今度の米中会談が一部の新聞は、  
米中正常化に近いなんて報道しておりま  
すが、わたしは全く当たってないと思っ  
てます。現に事実はその通りですが、や  
はり台湾がアメリカにとってどうい  
う意味を持っているかということを考えてい

いとだめだと。

といいますのは、わたしは台湾の背後  
にあるのは日米安保であり、シンガポ  
ルであり、タイであり、アメリカのアジ  
アにおけるコミットメントを象徴するも  
のであって、いま現在九千人といわれて  
おりますが、九千人の持っている兵力  
は、単にそれは戦力というものでなく、  
アメリカがアジアにプレゼンスをする  
ということ、つまり抑止力、その背後にあ  
るアメリカのコミットメントというもの  
を象徴しているのだと思うんです。だ  
から台湾を切ることは、簡単なようであ  
るが、それを切ることはアメリカの海外  
における防衛誓約そのものを疑わせる。  
だからアメリカは、台湾というものは、  
米中接近ということも考えても、絶対残  
しておくということも考えねばならな  
いと思うんです。

現に周恩来首相も、台湾政権の承認を  
取り消さない限り米中の正常化はあり得  
ない。また周恩来首相自身も、アメリカ  
にいくことはあり得ないということ言  
っているのは当然のことなんです。そ  
の点で、どうも日本側では上海コミュニ  
ケを取り違えて……。

中嶋 そうですね。全くね。  
井上 で、その取り違えるだけならい  
いんですが、それ以外に実害を被って  
いる。といいますのは、米中コミュニケ  
あと、アメリカでは、民間資本が続々と  
台湾にはいつてる。日本の商社のほうで

は、もう台湾はだめだというわけで北京  
に乗り換えた。でまた、最近になって  
台湾に戻っていくというふうなみつも  
ないことをやっている。これはマスコミ  
も悪いんですが、米中関係の現実、台湾  
のコミットメントの意義を理解しなかつ  
た。それでもう一つわたしの意見なん  
ですが、どうも北京のほうも、アメリカが  
台湾から急速に撤退するのは、対ソ戦略  
上まずいというふうな考えられているん  
ですが、その点いかがでしょうか。

中嶋 そうですね。中国自身も台湾の  
現状維持を望んでいるわけで、むしろ  
台湾がこれ以上出口のない状況に追い  
やられた場合、アメリカのひもを離れて  
どっちのほうへ台湾がいくかという懸念  
ですね。その懸念は必然的に対ソ関係と  
結びわけです。ですからある意味では、  
台湾自身もかなり流動的な変化をしつ  
つありますし、ことしの五月に台湾海峡を  
ソ連艦隊が通過したような、非常に中国  
にとっても刺激的な事件が起きておりま  
す。

で、ポスト蔣介石を考えますと、思わ  
ぬ事態になりかねない。それよりは、も  
うすでに気心の知れ合ったアメリカの保  
護のもとに置いておいたほうがいいとい  
う感じですね。それからアメリカはもう  
一貫しておりまして、つまり上海コミュニ  
ケの基本的な精神は例の、「ワン・チ  
ャイナ・パット・ナット・ナウ」です。  
一つの中国だけれどもすべてにはない。

現実をいかに現実として認めながら問題  
を処理していくかというところに、アメ  
リカの外交戦略があるという立場です  
から、その点考えますと、いま井上さんご  
指摘のとおり、台湾の将来は、かなり長  
い見通しを持って見なければいけ  
ないと思いますね。

井上 それから朝鮮問題も米中間で話  
し合われたという報道があるんですが、  
ここでもやはり駐韓米軍問題について、  
中国側は、ある一種の評価をしているん  
じゃないか。といえますのは、中国当局  
者は、駐韓米軍問題は台湾に駐在する  
米軍の存在に匹敵すると考えていると述  
べたといわれておるんですが、これは新  
聞の報道なんです。非常に悪い。  
以上のようなことで、全般的な締めく  
くりとして、今度のことについてどのよ  
うにお考えでしょうか。

中嶋 アジア全体を見ますと、米中が  
現状維持勢力になりつつある。それに対  
して、ソ連が現状打破的な勢力である  
と。つまり同じ三極構造でも、それぞれ  
の役割が違っています。このことが、必  
然的に今回の米中会談というふうなもの  
をもたらしたんじゃないかという印象を  
受けますですね。

井上 そうですね。われわれとして  
も、米中関係の背後にある、流動的な力  
関係を見がしてはならないと思っ  
ます。

(十一月十六日放送より収録)